

第二句集

田の津

丸山  
澄夫

題字

一志

水鏡

## 『田の沖』に寄せて

澄夫さんは、私にとって人生の、そして俳句の先輩である。

特に俳句においては、俳歴四十五年の大先輩であって、私が俳句を志し、俳句結社「鷹」に入会した時、澄夫さんは既に句集『麦嵐』を上梓し、「鷹」の同人として活躍されていた。

安曇野で菊の栽培を生業としている澄夫さんは、八十二歳のいまも現役で作業をなさっているが、一方、俳人として地元の豊科地域俳句会、長野県俳人協会、中信俳句協会の役員を務め、長野県内の俳句界向上のために力を尽されている。

私は、俳誌「羅」の創刊を機に、澄夫さんと句会を共にして、十五年近くになるが、毎回、澄夫さんの俳句に出合うことを楽しみにしている。句会では最年長者で

ある澄夫さんだが、誰よりも瑞々しい句を披露してくれ、私たちを刺激してくるのだ。

大方の俳人は年齢が高くなるにつれ、句がマンネリ化する傾向にあるようだが、澄夫さんの俳句は、ますます進化し、輝きを増している。常に柔軟な頭で、冒險することをいとわない澄夫さんの姿勢が功を奏しているからだろう。これは菊の栽培にもいえることで、澄夫さんは「あづみ農協花卉品評会」で四回の知事賞を受賞している。

第一句集『麦嵐』から二十二年、八十二歳を迎えられて到達した『田の沖』の俳句の世界は、膨大な季語に対する正確な知識を踏まえ、自由で豊かな俳諧味にあふれている。これは齢を重ねてこそ、得られた世界であるといえる。

また、澄夫さんは作句にあたり、齢や境遇に媚びないことを心掛けていて、「若い」「老」の言葉を極力封印しているというが、私には、澄夫さんは、むしろ老いを味方に、老いを楽しみ、気負うことなく俳句を楽しんでいるようにみえるのである。『田の沖』を一読し、澄夫さんの次なる第三句集を期待するのは、私だ

けではないだろう。

夫人の敦子さんも俳人として活躍されているが、豊かな安曇野の自然の中、夫婦で美しい菊を育て、俳句を詠いあう。これほどの幸せがあるだろうか。これからも澄夫さんには、俳句へのあくなき挑戦を続けて頂きたいものだ。

二〇一四年 秋

俳句羅の会

代表 飯 島 ユ キ